

平成 21 年度 第 1 回岩手県立総合教育センター運営協議会 会議要旨

日 時 平成 22 年 2 月 26 日 (金) 10:00~12:10
会 場 第 1 研修室
出席者 金子委員、玉川委員、千葉委員、門馬委員、管野委員、田口委員、樽松委員、
内澤委員 (佐藤委員、及川委員、高橋委員は欠席)
牧野学校教育室主任指導主事、センター所長及び所員

1 開会 (澤田部長)

2 所長あいさつ (藤原所長)

おはようございます。本日は大変お忙しい中、また濃霧の中、岩手県立総合教育センター運営協議会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、皆様には、日頃より当センターの運営につきましてご支援、ご協力を賜りまして、重ねてお礼申し上げます。

さて、この運営協議会は、当センターの運営の在り方等について様々な分野の方々から幅広くご意見をいただくことを目的として、平成 17 年度から始まりました。近年、学校が抱える課題は一層複雑化・多様化しており、また、教育基本法や学校教育法の改正、新しい学習指導要領への移行、そしてまた、教員の免許更新ということが打ち出され、実施に移されています。政権交代して、今後どうなるかなど様々な課題も出て来ています。そうした中で、教育センターの役割はますます重要度を増してきております。

このような時期に、皆様から当センターの運営に関するご意見を賜る機会は、誠に貴重であると考えております。頂きましたご意見は、今後の運営改善に役立ててまいりたいと思いますので、本日は忌憚のないご意見をたくさんお寄せいただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

3 出席者紹介

◎委員紹介 (澤田部長)

◎自己紹介 (牧野学校教育室主任指導主事、藤原所長、皆川部長、平賀部長)

4 会長、副会長選出

◎会 長：田口委員

◎副会長：千葉委員

5 会長あいさつ (田口委員)

おはようございます。会長ということでセンター運営に関する事業等、よろしくご協議の程お願いいたします。

今日は盛岡から、霧の様相で春が一步一步近づいているのかなという思いで参りました。先程藤原所長さんから様々な教育課題があるというお話がありました。私から見れば、そういう中で教育センターは様々な分野で活躍し、役割を果たしているという思いを、昨今のマスコミ等の報道等で感じています。ご承知のように、当センターは様々な機能をもっていますが、やはり最大の機能は、学校教育に関する職員の研修機関としての役割であると考えておりました。しかし、そればかりでなく研究機関として学力向上等、いろいろと支えられておりますけれども、授業改善あるいは教材開発等によ

り魅力ある授業づくり等の支援も行っております。また、教育委員会の教育行政の機能もセンターにはあり、そういう点では広い意味で本県の学校教育の充実発展にも寄与しております。

これから今日の話の中に出てくるかと思いますが、こういった様々な事業があり、非常に幅広い分野を担っている当センターの運営について、今後どうあればよいかということで、会の皆さんの話を十分伺い、それを事業等に活かしていきたいという話でありました。特に何かを決めるということではないようでありますので、どうぞ委員の皆様方が今感じていることを含めまして、忌憚のないご意見あるいはご経験を踏まえていただきまして 12 時までという限られた時間ではありますけれども、よろしくご協力をお願いいたします。

6 協議

(1) 平成 21 年度総合教育センター事業について

ア 経営計画について（藤原所長）

【映像・画像入りのパワーポイントによるプレゼンテーション紹介】

昭和 63 年に花巻市に移転して、今年で 22 年が終わるところであります。老朽化が目立ってまいりまして、壁のひび割れ等の修理が行われております。また、今年の秋には全教連の全国大会が花巻で行われる予定であります。

研修・支援・研究事業について、今年度は、免許更新がクローズアップされ、本県では授業力向上研修ということでスタートし、実施部隊としては当センターが中心となっております。今まで初任者研修・教職 5 年経験者研修・10 年経験者研修・15 年経験者研修と、5 年毎に研修が行われてきたが、免許更新が始まることとなり、教職 15 年経験者研修が廃止となり、このあと 10 年毎に 34 歳、44 歳、54 歳と進んでいくわけで、キャリアライフステージに沿った体系となりました。国では政権が交代したことにより止めるという報道がありますが、本県では免許更新ではなく、授業力向上研修としてその時々における力をつけるために続けていくという方針であります。34 歳では指導力充実期、44 歳ではミドルリーダー能力発揮期、54 歳では総合力発揮期ということで、研修はやはり 10 年おきには必要であろうとの発想であります。

実施状況ですが、スタートは法貴教育長による岩手の教育ビジョン、岩手の教育課題について課題を解決するためにはどうするかということで、様々な方向から講義が進んでいきます。IBM 最高顧問、岩手大学等県内大学の先生方、コーチングアカデミー等いろいろな方面の方々に来ていただいて展開していきました。会場は、共通部分は盛岡駅西口のアイーナで行われ、教科別については当センターできめ細かく行われました。研修者の評価としては、岩手の教育課題についてしっかり押さえることができた、多彩な講師陣であった、専門性を深くじっくり学ぶことができた、等でありました。講師の構成は、県で実施しておりますので、大学関係者は 1/4 に抑えられ、現職・退職の校長先生方、指導主事、センター所員も 14% を占めており、民間の方々の様々な角度からも来ていただいております。

支援事業ですが、現場に役立つセンターということで昨年より一層力を入れているわけですが、センターで研修される先生方は年間で約 3,500 人。今まではセンターに来ていただいて研修を受けていただいており「待ち」の姿勢でありましたが、今年度からキーワードを「打って出る」として、職名を研修主事から研修指導主事と「指導」の 2 文字を付けていただき、県内各地に出歩いております。

一つ目は情報モラル関係で出前がどんどんと入りまして、さらに県内で 4 つの地区でフォーラムを開催、また、高校の先生方を中心にリーダー養成として 100 名、さらに 35 市町村に講師を派遣しており、現在は県外からも要望があり、出かけております。

二つ目は小規模・複式関係であります。初めて転勤したら小さな学校で複式を担任すること

になった。授業のやり方等どうしたらいいんだろうと非常に困っている状況がありました。各教育事務所、地域毎に研修はありますが、どうしても6月の半ば頃になってしまう。そこで当センターでは4月の初めからどんどん出て行って、しかも授業やってみてくださいというのではなく、こちらがモデル授業を展開し、それを基に皆さんどうですかという展開の仕方です。それならばということで評判がよく、たくさんの要請があります。幼稚園でも学校とは違い、自習がないので職場を空けられないため、出前研修をしております。また、子ども会あるいは学校で理科の実験等も行っております。

内容ですが、「情報モラル」携帯電話やインターネットを使って犯罪に巻き込まれないようにするための未然防止。「教育相談」も多くなっており、外に出向いての教育相談。「特別支援」の関係も多くなっており、「幼稚園」「小規模複式」「理科」あるいはその他の科目も電話一本で行っております。

研修申込については、交流ネットを利用して省力化を図っております。今までは小中学校→市町村教育委員会→各教育事務所→センターへの流れがあったのですが、一変にダイレクトにつながましようということで、交流ネットを使ってセンターまでダイレクトに申込を行ってもらい、市町村教育委員会・各教育事務所へはセンターに研修を申し込んだ旨の確認だけはしていただくことにより合理化・省力化を図っております。

交流ネットにつきましては、講座の申込を始めセンター発表会の弁当の注文、分科会への参加申込・アンケート調査も行い省力化を図っております。

また、地域に開かれたセンターということで、11月の文化の日にセンター公開を行い、地域の子どもたちに来てもらい、粘土消しゴムの作成等をして親子で楽しんでいただいておりますし、地域貢献活動としましては、20年前に手作りした御輿を担ぎ、花巻祭りにも参加させていただいております。

研究につきましては、活用に関する研修として分科会を行い、この中の家庭学習に関する調査研究について、この後紹介し、ネットでも公開しておりますけれども、岩手県児童も生徒も教師も一生懸命やっているが、どうして客観的な数値の成果が出てこないのだろうかということで正面から取り組んでいこうと考えました。お配りした封筒にもありますが、丁度一週間前の先週の水曜日木曜日の2日間行われましたセンター発表会であります。

今までも学力向上をどうするかというテーマで、様々話し合われてきましたが、時間切れが多くみられましたので、今回は、午前中に佐々木教育次長から岩手県の学力面での小中高の現状について、どう対応していくかを県レベルから40分にわたってプレゼンをしました。その中身が読売新聞の中でずいぶん大きく特集で取り上げられております。それを受けて、私の方から小中学校の先生方にアンケート調査を実施したアンケート結果に対して、先生方・親・子どもたちは、どういう生活でどういう意識をもっているのかをプレゼンしました。この後紹介します。午後に家庭学習・校内研修の二つに分かれた分科会を行い、最後に部活動等との関係はどうなのかということで、高等学校の成果を上げている部活動指導者のミニ講演会を実施しました。

二日目は、学力向上の流れを受けながら、岩手のキャリア教育をどうするか、引き算かけ算の出来ない子どもが企業に入って大変苦勞している。やはり部活動もいいが、基礎学力は最低限必要だという話等々が二日目の午前中、午後には生徒指導を様々な角度から話をさせていただき、同時並行で教科分科会も行われました。

家庭学習の調査につきましては、一日目の佐々木教育次長の話について新聞報道でかなり詳しく報道されておりますけれども、まず調査人数ですけれども、県内の小学校3年生、6年生の先生方300名程、中学校は3年生の国語・社会・数学・理科・英語の5教科の553名の先生

方、小学校3年生、6年生の児童・保護者、中学校3年生の生徒・保護者500名ぐらい集めました。

全国の調査ではわからないところを様々調べていこうと、岩手県の小学校6年生、秋田県の小学校6年生、宮崎県からも中学校の先生に来ていただきましたので、その3県を比較してみようという試みです。

【別添資料「平成21年度全国学力・学習状況調査」 「岩手県内小・中学校の家庭学習実施状況に関する調査」結果から、パワーポイントによる3県の比較紹介】

-----別添資料参照（内容省略）-----

発表会の全体会ですが、花巻温泉の巖鷲の間で行い、900人程集まりました。53回目を迎え初めて花巻温泉を会場にしました。それはなぜかとういこと、今お話したようなシビアな話をセンターの場合では、体育館で500人しか入らない。そうするとテレビ中継で各部屋で見ることになるのですが、それでは緊迫感がない。全員が一堂に会して、同じ緊迫した空気ということで、文字どおり一堂に会しての発表会が実現したのが今年の発表会であります。

二日目、キャリア教育ですが、ここでは農業・工業・商業・水産の校長先生が小学校、中学校の先生方に専門高校とはどんな事を勉強するのだ、勉強ができないから行くところじゃないというきちんとした理解をしてもらう。小学校、中学校の校長先生からは発達段階でどう取り組んでいくかという話をいただき、産業教育、キャリア教育を考えるということで3時間たっぷり話し合いを行いました。

教育相談では、壇上でパネルディスカッションを行い、今まで15分間発表して、はい質問ありませんか、はい次の方という評価の発表会が多かったのですが、発表件数を絞って内容の濃いものだけにして時間を長くして、さらに余った時間を作ってそれぞれの専門の方に登壇していただいて話し合ってもらおうという工夫をし、昨年よりもそうした分野の参加者が増えたところであります。

最後に高校の3人の方々に実践発表をしていただきました。

例年ですと、15時を過ぎると、遠くの方々がどんどん帰られるのですが、今回は高等学校の指導実績のある先生方3人ということでご案内したところ、どんどん人がむしろ増えたという状況です。最初の花巻東高校の監督の話をぜひ聞きたいということで、ホテルの従業員の方もいたりして、目標を持って目標が必ず向こうから近づいてくる、多くの野球の監督や甲子園での監督のインタビューを聞くと精神力とかいろいろ話しますが、野球で勝つための話なのです。佐々木監督は、どうやって生きるかということで野球を意識していない。大学に行ってもどうやって食っていくか、宿題をちゃんとやらせるということで、大会が近づいていたとしても定期考査があると一週間は部活中止で勉強させる。菊池雄星が有名になっていますが、彼は40までしかいくら頑張っても野球は出来ないということで、その後、中学校の先生をやるということで今通信教育の入学をしたとか、野球はその中のほんの一つだというそんな話をしておりました。

佐々木先生の話を知れば、席を立とうという人も中にはかなりいたのですが、いきなりブーンと音楽が始まりまして、合唱のすばらしい音声が会場を包みまして、そしたら動けなくなりまして、感動で涙が出たり歌を通して世界平和を訴えたり、世界中を回って講演しているという、不来方高校合唱部の先生。

最後に雫石高校の養護教諭の先生で、保健劇を中心に生徒を立ち直らせる。1割の子どもが退学する学校ですけれども、生徒がいなくなったので盛岡の町に深夜出かけると、たむろしている子どもがいて、そしたら「くそババー」と言われてつばをはきかけられたり、様々なことがあった。でもその子どもたちがかわいくてしょうがないと、そういう話をしていただきまして、最後メイクが崩れるくらい大泣きで、バス時間に遅れる方が続出して、運営面で大変クレ

ームを受けたというぐらいの1時間半でございました。本当に感動的であったという話で終わっております。

最後に、終わりになりますけれども今年も大雪が降ったりしまして、センター所員も総出で除雪にあたりたりしております。いろいろとお話を申し上げましたけれども、ありがとうございました。よろしくお願い致します。

イ 研修事業について（皆川部長）

センターの中だけでやっている講座については、例年ほぼ同じ数で推移しています。研修を受ける人は毎年ほぼ3,500で推移しています。基本研修は、その時期に当たっていたりその職にあれば必ず受けなさいというものであったり、言い方を変えればいやいやという部分があります。特別研修もそれに近いものがあるわけです。希望研修は、逆にぜひやってみたく自分から希望して受講するわけですが、いずれもやってよかった、まあまあよかったとA Bの割合が多くなっております。これは毎年毎回研修後にアンケートをとりまして、どのような研修を望んでいるか、どのような点を改めたらよいかというご意見を頂くという形をとっていますが、それを活かしながら次年度のものをいろいろ工夫して参るわけです。例えば今の先生方はどちらかというマニュアル的なことを希望している傾向にあります。理念より実際教室でどういうふうなやり方があるのかを求められるケースがあり、そういう希望があればそれに応ずる内容をやらなければならないわけです。いわゆる学習指導要領が何年かに1回変わると、今回もその時期がまいりました。これからの学習指導の中には、特にも小中はだいぶ意識されて内容も基本とすべきこと、そして具体として応用出来ること等、工夫しながら設定しております。先生方の中で、今回は特にも授業力向上ということが先程の説明の中にもありました。34、44、54という年代を想定しております。岩手県の学校教員の平均年齢は50を超えております。言い方を変えれば学校教育を一番支えている中心となっている年代が50代の前半。54という定年が60と考えると、逆にベテランの域に達している意識がそれぞれの先生方がお持ちになっているわけですが、実際学校を動かしているその世代だという方に授業力向上研修を受けて下さいといったときに、たぶん消極的なイメージをもたれるのではないかと、今年度スタートするにかかわっても大変そのあたりが危惧されました。講座の内容は、やってよかったと満足感をもっていただくために様々な工夫がなされておりました。34、44の方々はもっともっと知りたかったと、先程小学校の例がありましたが、一つ一つの時間が短いと仕方ない部分ですけれども、少人数でどんどんやってきて例えば小学校の54の方は全くやったことのない研修を相当受けられました。体育の研修はたぶん初任研・5年研以来だと思えますけれども、そういう具体のもの、そしてこれから求められる学習指導の在り方、内容も今回一気に研修することができた。終わってみれば大変よかったと、いやいやながら来たのではないかと消極的ではないかという心配もあったわけですが、終わってみたら例えば54歳の中学校の八重樫勝委員長の講義の中で最後に泣く場面もあったりと、そういうふうに分身のこれからのエネルギーを得る機会になったということもございました。そういう高い評価を得ることができまして、来年度も活かしていきたいと考えております。

出前研修については、平成19年に123件の確認はありましたが、当時はあまり積極的に対応していなかったかなと思えますけれども、人数的に把握できなかった。昨年度から一つ一つを積んでいったところ、非常に好評であった。昨年度は一番多かったのは情報モラルの研修ですが、今年度は学校教員以外のニーズというか、例えば花巻地区でも地域の老人会の方々ぜひ環境のことについて教えてほしい、蛍のことについて教えてほしいと、そういう本当に素朴なことから、ぜひセンターを利用したいというふうにつながって、様々なところからも声がかか

ってまいります。例えば、情報モラルにしても県警の関係のところから要請がある、または県そのものの機関から要請があるということで、ますます口コミで広がっております。所員の数で件数をみますと、一人で10回以上対応している計算になりまして、これ以上対応を伸ばすことは限界に近づいているのではないかと、むしろこれからはそれぞれの地域に中心になる方を養成するような観点から、直接指導に当たるというよりはむしろ拠点をつくるというふうな方向性になるのが、これからの出前研修の在り方なのだと思います。来年度4月の小規模複式の申込がすでに入っております。4月早々誰が担当するかまだはっきりは申し上げられないということで詳しくは言うておりませんが、本当に4月の最初の時期にすでに予約が入っていることから、センターの存在価値は十分に認めていただいているのではないかと考えております。

来年度において、目玉として考えておりますのが今までは学校に配属されている講師についてその都度任用される時期が違って、結局一度も研修を受けられないまま初めて教壇に立つ例も少なくないということから、常勤・非常勤も含めまして、講師の研修会をぜひやりたいということで本庁とセンターで検討して実現する運びとなっております。特に中学校に今回は絞りまして150人を想定して行うことを考えておりますし、また、採用予定の方々について今までもスクールトレーニーということで、研修の機会がありますということで話していたんですが、来年度ははっきり期日を決めまして希望される場合には参加できるということで、実際に4月1日採用されて以降の様々な初任研が待っているわけですけれども、前段階をやればなど、これは初任研の配置校の校長先生からの意見としてやはりもっとセンターでしかできないことをぜひやってほしいと校内研修が重要だけれども、例えば社会人としてのマナーとかそういうレベルでぜひやっていただきたいと言われましたので、教科のいろはについては当然やるわけですが、大学を卒業したばかりの方、または講師経験はありながらそういう機会に恵まなかった方々の研修の機会になればいいと考えてやっております。

ウ 支援事業について（平賀部長）

支援事業は、大きく二つに分けて教育相談の事業と教育情報資料提供の事業を相談と特別支援と情報教育の3つの担当が行っております。

教育相談事業につきまして、大きく二つ、学校生活に関する教育相談と発達に関する教育相談を行っております。学校生活に関するものは、不登校、いじめ、学力不振、子どもの非行等での悩みに関する相談を受ける事業であります。かつてはセンターに来所いただいておりますが、最近では出前相談ということで学校等に出向いて、そこで相談を受けたり実際に生徒の様子を見たりしながら相談のケース会議を開いてどのような対応をしていけばいいのかを考える場になっております。発達に関するものは、主に特別支援的な支援の在り方ですが、最近特に多いのが発達障害に関する支援です。これも来所していただいて相談を受ける場合と、出前相談といって学校等に出向いておのおののケースを見ながら対応を考えていくという対応をとるものとあります。

それぞれ学校に行った場合、それぞれのところでは教員に対しての研修会に参加いたしましたし、例えば教育相談の場合でありますと、単に非行のある生徒に対して今までのような厳しい指導というよりはカウンセリングマインドをもったような指導の在り方の研修会の持ち方を提案したりとか、発達支援に関する知識を小中の先生方にも研修を受けていただくということで実際に学校に行き説明をしたりするということをしております。

教育相談は67件の増加でありまして、発達に関するものも26件の増加ということで、いずれにしても増加している傾向にあります。今特に発達障害がもとで学校に対しての不応等を起こしていることもありまして、お互いの相談用務の双方が協力し合ってやっていく場面が増

えております。研究発表会の分科会では、最近では発達障害に加えて児童の虐待や親の養育の放棄によって子どもの障害が出ているというような新しい問題、課題への対応等、様々な専門知識が要求される場面が多くなっており、そういうときにセンターで研究した指導主事たちが出向いたり来ていただいたりして相談を行う体制を組んで、子どもたちの学校や生徒・保護者あるいは教員の困り感に寄り添うような形の支援をしていきたいと考えております。

刊行物・教育情報・資料提供等については、情報モラル指導について主に情報教育の研修指導主事が対応しているものですが、メール等によるネットの学校裏サイトなどの情報機器をつかった問題が起きておりますので、それに対しての教材を開発しまして限られた学校という中に模擬的なネット社会をつくりまして、実際に悪口を書き込むと実は誰が書いたか特定できるという形の情報モラル授業を展開しております。これは、学校の教職員・児童生徒・保護者あるいは教育機関以外からも要請があり、行って研修しております。研修人数は1万人を超えています。学習支援・情報共有サイト等の支援も情報教育で担当しており、より一層効率的に学習をしたり事務作業を行ったりするための支援も担当しております。

エ 研究事業について（皆川部長）

教育研究発表会は今年度も大変好評でしたが、前年度までは冬休み中ということで比較的参加しやすい環境にあった。今回は3月のど真ん中ということで学校を空けるにも空けられないということでハードルの高いものになりましたが、結果的には大変多くの方に参加していただきましたし、感動的であった。今回は全体が学力向上につながるということで最後まで聞いてもいいですし、その部分だけ聞いてもいいですし、良かったということでご意見いただいております。

研究事業につきまして、本数が104本から77本になっております。これは今まではぜひうちの学校でやったものを発表させてほしいということで、例えば国語だけで30本近くの希望があってそれを全てやらなければならないという状況でしたが、今回は、県政課題に係わってもっとも絞りたいということで早い時期から話をし、結果的に申し込みも減りましたし、中身も優れたものが集まった。とりもなおさず今回は発表しっぱなしではなく、問題意識をもって具体的な悩みとかを出し合う場を各分科会の担当者に一任いたし、シンポジウム、パネルディスカッション、様々実践発表があり、講演会も設定したところもあります。一つ一つの分科会が全く違う中身で、わたって見られた方もいるようですが、どの分科会も大変素晴らしかったという話をいただいております。その結果、全体の発表本数は減ったわけですが、参加数はおかげさまで増えております。来年度につきましては、今回実践発表がありましたが、それを具体的に学校現場でやっていただくというところを主眼にしております。ある市町村からぜひうちの学力向上プロジェクトとセンターの研究をタイアップさせてほしいという申し入れがあり、その準備が進みつつあるわけですが、今までは研究協力校にお願いする、または研究協力員にご意見をいただくという形で実践化を図るところがありましたが、今度はまるごと市町村が市内の小中学校をぜひ活用させてほしい。そんなに精力を注ぎこんではできませんが、これからの研究実践の在り方、センターの活用の在り方としてはいいのではないのかなというふうに感じております。

長期研修生は、今までは研究オンリーでしたけれども、教育相談にかかわっては要請するという視点を盛り込みまして、4人の方がやられる。小中高の3校種ですが、今までとは違う研究主体の長期研修ではなく要請のほうにも進ということになっております。

(2) 質疑・意見交換

【樽松委員】

法律が変わることによって、今まで法的には義務だったものがなくなることがあると思いますが、今後同じようなことが起こるかもしれず、それについて今十分効果があると思われるものは継続する方向でいるのか、それとも法律が変われば仮に良い研修であっても廃止するのか、長期的なビジョンがあれば教えてほしい。

また、例えば年齢の違う研修者同士が交流する機会を設けてはどうか。イメージでは、初任者研修を受ける方が、34歳の授業力向上の研修を受けている方からの体験談を聞くだけでもかなり効果があるのではないかと。小中高がそれぞれ独立で行っているのか、それとも年齢でつながっているのか。

いわて交流ネットを使って、出前が一本きたらすぐ出ていくということで、件数が増えており、大変だというのはわかります。人数的に厳しくなってきたので、今後拠点を作る方向であるということでも確かにそうと思いますが、以前センターにいた方を利用することは考えていないのか。

研究発表会に関して、発表本数を減らして内容の濃いものだけ発表するのはよろしいかと思いますが、ただこういうことをやったのだということを発表したいという方もいらして、今回選ばれないとダメと思って次に来ないとなると困ると思うので、資料のみはいただいて、口頭の発表はないけれども、資料は皆さんにお配りする、またはネットでダウンロードできますという公開を試みたらいかがでしょうか。

【藤原所長】

法律が変わってということで、県教育委員会としましては、免許更新について県の責任をしっかり果たしていく方向から、大学に任せるのではなく一緒に中身を詰めていくという基本的な考え方で詰めていった経緯があります。最終的に、結論からしてそれぞれ独自でということになっております。

一部マスコミによっては、個人が経費負担して受けなければならない免許更新を、県が公費負担でやるのかという論調の新聞がありましたが、県としては、決して子どもたちの学力は十分でないし、先生方の研修は当然必要だということ、年齢構成からしても新採用から50代まで同じ人数であるのが理想ですが、40代をトップにして50代が20代より多いといった高齢化でピークがすすんでいくという流れの中で、今までは50代になれば研修を受けなくてもいいという時代ではあったが、これからは50代になっても教壇に立ち、生徒と接する時代が来ていること、きちっとした研修が必要なことから、免許更新ではなく、岩手県では授業力研修として議会を通し、県の研修の機関として位置づけた。全国的にも、センターの所長会議等で、昨年度は岩手県はよく面倒なことに首突っ込んだなど、他県では大学に任せようという空気で極めて少数派だったのですが、今年度になって、高齢化している年齢層になって、40代50代の研修は必要だが自ら手を挙げて来ることはなく、50代ではいまさらということもあって、岩手の方式はいいタイミングでと評価を受けています。スタートは免許更新という中で試行錯誤しながら苦労しながらつくったわけですが、40代50代が受ける当研修は今後とも岩手県の研修の中で輝きを放っていくものと信じております。

年齢の交流については、センターの研修等でも年齢別に分けるものと、一緒になるものがあります。年をとっても一教師としての思いが甦り、それが大事かなと思っています。

小中高の交流では、今までセンター発表会という小学校が先生方7割ぐらいと非常に多く、高校はほとんど参加されないということで、今年は特に高校にウエイトをおいて県立学校長会議にも行ってアナウンスをさせていただき、実践発表の3人、キャリア教育でも農工商水の校長

に参加していただきました。岩手の教育も小中高の連続の中でという意識は特にも気を使っているところでもあります。

これから適度な縮小も兼ねながら効率的な仕組み作りをやっていかなければならない。OBの活用は十分にやらせてもらっていますし、カウンセリング・教育相談も出向いてやってやるのも限界がありますから、養護教諭に来てもらい要請研修の形で、長期研修も今までは論文研究をやって論文を書くという形式でしたが、一部養護教諭に要請研修という形も入れながらそういったネットワークづくりもやっていこうとしております。

発表の数は減らしてもらいました。今までは中間発表が数多くありその辺をご遠慮いただいた。また、同じような内容のものは絞らせてもらった。それによって発表で埋もれることのないようネットなどを使いながらご意見いただいたとおりに検討してまいりたい。

【玉川委員】

34、44、54 の研修の話がありましたが、特に学校で他から見ている大変だろうと思うのが 54 の研修ですが、こういう教員でありたいという求める資質について何か県としてあるいはセンターとして 54 歳の教員に対して求める像はあるか。

【藤原所長】

54 歳を担当するのは岩手県しかなく、全国どこをみても年齢別はなく、自分で好きな講座を選んで免許更新する。岩手県の場合、教科別・年齢別を入れているわけですが、54 に話ができるのはセンターにはなく、そこでお願いしたのが八重樫勝教育委員長に 2 コマやっていただきました。この研修に来るにあたって、今どんなことを思っていますかと、事前にアンケートをしました。そうすると、今さら何でという思いが出てきます。自分の教師としてやってきた体験談を話されながら、教師として子どもと触れ合うことを目的にやってきた一教師であるという思いを述べられました。最後のアンケートでは大変よかったということで、年齢にかかわらず一教師として子どもたちにどう向かっていくかということを押さえていた。

【田口議長】

全体的なセンターに対しての要望も含めて何かございましたらお話しいたきたい。

【樽松委員】

家庭学習に関しての調査研究について、研修で保護者の方を集めて研修をする。例えば今このような状況なので家庭学習も大事ですよみたいな研修をしてみても面白いのではないかと思います。業務の範囲を超えてしまうような気がします。家庭学習が大事だと言い切ってしまうだけではなく、その辺についてどのような考えがあるのか。

【藤原所長】

研究のための研究で終わらせないために仕掛けをしようとして発表会で宣言しました。家庭学習の在り方、校内研修をどうあるか。これについては実践をやってもらうということで八幡平市に市を挙げてそっくりそれを実践していこうという声が上がっています。そのあたりを基にしながら全県下に広がればいいと思っております。保護者を対象にした研修ですが、今まで教員の研修の場ですということで、これはできませんとか、ここまでが守備範囲ですという傾向がありました。今は子ども会の天体観測等様々なことをやっておりますので、可能だと思います。来年度は事務職の研修も予定しております。そのような流れの中で、家庭学習等についての研修等も可能だと

と思いますが、どこをどのように整理してどこまでやるかというところで貴重なご意見ですし、旬な話題ですので、形にしていきたいと私は思っております。

【田口議長】

センターとして、時代の要請とか、社会の変化などにも柔軟に対応しながら現場の先生方のニーズを受け止めたり学校現場からの要請等もあるのではないかと思います。現実問題ここに来て研修を受けるのはほとんど先生方が対象ですが、せっかく本日は各校種の校長先生がおいでですので、センターに対する感想でも結構ですし、あるいは要望でも結構ですので自由に現場の意見として一言ずつお願いしたい。

【金子委員】

家庭学習については自主的学習が多いということで、本校では子どもが家庭学習してきたものを授業に活かすことをテーマに取り組んでおり、難しい面もあるわけですが、本校は50平均の教員が多くいますので、積極的に研修に参加させて資質向上を図ってまいりたい。

全国小学校長会の理事会に出席しまして、千葉大学教育学部の教授から千葉の中学生の勉強、テストに対する取り組みの実態調査アンケートの結果が発表され、時代を反映している実態が見えました。「勉強だけが人生じゃない」という生徒が39%おり、これが世の中の閉塞感といえますか、ただそれをやっただけでは意味がないという時代背景を表しているのが子どもたちに反映している。岩手はそこまではっていないと思いますが、児童生徒の実態を把握しながら、生きがいを指導できるようなしくみを取り組んでいただければありがたい。

【玉川委員】

システムを見直していくことは必要だろうと思いますし、いろいろな学校のニーズに応える部分についてそういったことをやってもらえればすごくありがたい。ニーズの観点からマニュアルを求める教員が多いというのがありましたが、21世紀になってから個人的に感じているのですが、世の中の風潮として即効果があるものに飛びついていくことを感じている。学校教員の中でもすぐ明日の授業に役立つことを覚えてやってみる。ただそれだけで本当に教師の授業力がついていくのかなと。必ずしもそうではない。明日の授業に困っても、困りぬいて生徒の前で立ち往生しても、そういった経験を通しながら、そういう体験をしながら、生徒にとっては迷惑な話かもしれない、あるいは保護者にとっては先生何やってんだという話もあるかもしれないけれども、教育をしていくことは必ずしもそれだけで癒されるものではないのじゃないかなということを感じ、センターでしかできないことという話がありましたけれども、マニュアルを求める先生が多い中で、人間としてそういった経験も必要だという思いもしております。実践力の部分から言うと、学校で先輩から学ぶという世代を超えて常に毎日子どもを前にして課題に立ち向かっているわけですので、そういった部分で学ぶことが多い。50代の教員はかなり経験を蓄積していることが多い。50代の教員の知恵を活用し40代、30代の教員に対して活かしていけるようなことが必要であると感じています。

家庭学習については、義務教育段階の子どもたちは様々なレベルの子どもたちを目の前にすると、机に10分向かわせることから必要な子どももいる中で、家庭学習時間等の調査を平均でも、なかなか子どもの実態に向き合えないと思います。様々なレベルの子どもに対して、どのように家庭学習に向き合わせるかということを学校としては考えていかなければならない。授業と家庭学習のつながりを含めた学習習慣、学習の在り方を考え、学習への意欲の在り方について追求していく必要があると思っております。また、岩手県の中でも地域によってもだいぶ違いが

あるのではないかと思いますので、地域的な違いがデータとしてあれば見たいなと感じました。

【千葉委員】

免許更新に関わる研修については、国の法律が変わってもぜひ続けていただきたい。大学進学したい生徒についてはセンター試験までは引っ張って、大学受験レベルまでの学力をもって大学に出してやろうというスタンスできており、そういう意味で受験者はかなり多くなっている。昨年度までの東北6県の国公立大学合格者を度数分布で見ますと3番目ぐらいに位置していますが、今年は秋田県が高校までできており、宮城県は4月から全県一区という制度になり、度数的に言えば東北で、ずば抜けている状況でございます。そのような実態がありまして、学力向上が高校段階では一番の問題で、特に就職する生徒についても昔は、とにかく入ってもらい企業の中で訓練しますということだったのですが、今では企業にそういう余裕がありませんので、ある程度できあがった力を持った生徒を求めている、できあがったところを出してくれというのが今の企業の要望です。今度の新学習指導要領では学び直しという単位も出てきますが、現実には、1ヶ月長ければ2ヶ月ぐらい中学校の復習をしながら授業している学校もあり、九九から復習させている学校もあり各学校では工夫しながらやっている中で、高校の場合は出口を保証して考えていく必要があり高校が最後の学校になる生徒が6割おりますので、そういう意味でしっかり将来を見通せる様な子にして出してあげなければならない。高校とすると中学からある程度の部分があって即高校の授業に移ればいいのでありますが、これが今大学の方に移っていて学び直しをさせているという部分があるわけですが、日本中が3年ぐらいずれこんでいる感じがしているところでもあります。

去年、一昨年授業力向上の英数で話させていただきましたが、義務と県立の教育文化が本当に違うものだなと感じました。葛巻高校の中高一貫を立ち上げてきましたけれども、中学校に行くと授業の持ち方を検討したら、お互いよい体制でいくということがありましたので、センターの研修の方でも中高の交流の在り方とか、中高の交流の中でオープンにやっていく部分、どんなふうなつなぎ方ができるのかというのがあればすごくいいのかなと思います。

実際、中学を見ていて学習シートを使っているということで、いわゆる予習という部分で先に進もうとしない、授業の中ではわからないふりをしているという子が結構いる。盛岡地区ですと塾にいった先までわかっていますが、やはりそういう部分がある。教科書があれば先までいっている。先までもっと出来る子は教科書があればできますし、シートの中で縛られている。型にはまった部分の現場の授業かなと思います。高校に入ってくると、一人一人が出来ているかチェックせざるを得ないので、そういう意味で交流はもっとあっていいのかなと思います。

高校長協会では、中学校に働きかけようということで、市町村教育長との懇談を計画しております。教育長に働きかけて理解してもらわないと、中学校に言いにくいこともあるのかなという話が出てきまして、その仲立ちをセンターと協力しながら進めていければと考えております。

【門馬委員】

特別支援の制度が出来て今年で3年が終わる。変わりそうでいて変わらないという実態があります。理念においては大きな違いがあるが、そのことが十分に浸透していないのが現場感覚としては相当あります。一つには、理念がニーズ教育というのがありますし、子どもが在籍するすべての学校で特別支援教育が行われるのが二つ目。最後が共生社会の礎になる教育を行うことが三本目で、三つそろえて特別支援教育の理念となっています。そもそも分けて教育するということから別の方向に向かっていると思いますが、それが実感として見えてこないということは、県立学校の高等部の知的障害の倍率が一番多い。高等学校が100とするならば盛岡峰南で300までは

いかないが二百数十%のところがあります。それがいったいどういうことなのかということが問題としてあります。保護者に詳細を聞いてみましたところ、就学指導委員会の存在そのものを知らない方が50%以上いることが判明し、もうひとつは、心理検査・知能検査等ですけども、心理検査をした後で保護者に説明があつてしかなるべきなのですが、これがないのが50%を超えていたという事実がありましたので、特別支援教育を考えると、まだまだやるべきことがあると思っています。研修や研究の段階ではないですが、研修については、一番大切なのは、特別支援教育とは何なのかと考えられることで、教育者としての行動が、理念に沿って、あるいは岩手県の特別支援教育プランの示す内容に沿って指導していけることです。特別支援学校の教職員のみならず、すべての幼小中の教員が同じ方向を向いて特別支援教育の内容理解が必要だろうと思います。

研修では特別支援教育の他にはキャリア教育が必要であります。障がいのある人たちが社会に出て行くことになった時に、時代時代に必要なものがあります。それをしっかりと押さえられるキャリア教育は小学生からやっていくものであるが、研修の分野としては今一番欲しい。現場では一番欲しいと思っているところです。センターと学校教育室の連携のもとにキャリア教育の分野をすすめていただけると、すべての障がい者の学校で対応できるのではないかと思います。

【内澤委員】

私の小学校中学校時代を振り返った時に、昔はもっと乱暴だったような気がしています。今は細かく手取り足取り指導していますし、教員を目指している大学生の取材をする機会が多かったものですから、彼らの熱意とかこういうふうな授業をやるということ自分たちで工夫して、それを先生方が評価してというのをずっと重ねてきて、現場に行くともたいろんな局面があると思いますけれども、大学生の頃から非常に高い志を持って訓練を受けてきているにもかかわらず、新聞等の原因はどこにあるのだろうと、先生方の話を伺いながら考えてしまいます。これは研修とかのレベルではないのかもしれないと思ひまして、かといって教育センターというシステムが親と直接となる機会もないでしょうし、研修以外のところでも、日常的にセンターと現場の学校と親が情報を共有でき、しっかりと伝わっていけるシステム、情報発信が出来ていければいいのかなと感じました。

【田口議長】

研修というのは、研究と修養からなっておりますので、修養の部分にも力を入れていただきたいですし、そのためにも民間からどのような講師を招聘するかについても工夫していただきたい。

家庭学習については、県教委も家庭学習の習慣化の取り組みを全県的にすすめていると伺っておりますし、本県独自の教育振興運動の中でも各地区の団体が家庭学習、読書活動等の新たな取り組みを行っている伺っております。小中高が連携をして本県の子どもたちの更なる成長向上を図っていただいたいという意味でも、教育センターの果たす役割は大きいのではないかと感じております。

最後に、折角今日県教委の方から牧野主任指導主事がおいでですので、もし何かございましたら、一言お話いただきまして、この会を閉じたいと思います。よろしく申し上げます。

【牧野主任指導主事】

課長の代理で来ておまして、言える立場ではないのですが、今出されたお話一つ一つがごもっともだと思い、承りました。特に私自身センターのOBでもございまして、センターの役割が

かなり変わってきていますけれども、出来るだけいろんなニーズに応えるような形でセンターが、ますます機能していけるような形で、私たちも先程来出ております学力向上につきましても様々な施策は打っています。ただいま内澤委員さんからご指摘あった、これだけ手を尽くしているのになぜということはそのまます上司の方に伝えておきたいと思います。

また、先程来出ております免許更新に関わりましては、様々な動きがございますが、法貴教育長は、しばらくこの形を維持していきたい、そのために県の研修として立ち上げたのだということでおっしゃっておりますし、来週の県議会での質問にもそういった形で答弁がなされるはずでございますのでよろしくお願いいたします。大変ありがとうございました。

【田口議長】

以上をもちまして、協議の一切を閉じたいと思います。これをもちまして議長も任務も降りたいと思います。ご協力誠にありがとうございました。

7 その他（澤田部長）

今日の旅費・報償費につきましては、該当する委員の皆様に対しまして、ご報告いただきました口座に速やかに振込みいたしますのでご了承願いたいと思います。

次回でございますけれども、来年の2月開催の予定でございます。

8 閉会（澤田部長）